

筑波大学の「今」を切りとる季刊広報誌

TSUKU COMM

TSUKUBA COMMUNICATIONS

【ツクコム】

vol.
46
2020 WINTER



筑波大学
University of Tsukuba



2020 WINTER **TSUKU COMM** vol. 46

04 「聴」藤田晃之 教授

08 「TSUKUBA OBOG」平野国美 氏

10 「附属学校めぐり」筑波大学附属駒場中・高等学校

12 「LIFE 筑波大生」ジェデウラエフ・ボホディルさん / 千葉玲海菜さん

14 TOPICS | 19 可能性をひらく | 20 リレーメッセージ | 22 筑波大学の入試改革

聴

INTERVIEW



自分を記録し、発見する

豊かに生きるためのキャリア教育

人間系

藤田 晃之

教授

Teruyuki Fujita

「大人になったら何になりたい？」その問いに明快に答えられた人、また、その通りに実現できた人はどのくらいいるのでしょうか。子供にとって、世界はまだ小さく、今の自分の関心事や生活と将来とは、必ずしもつながってはいません。その視野を広げ、成長の過程を通じて、自分ができること、得意なことを発見し、それを生かしながら、変化し続ける社会で生き抜いていく力を身につける。それがキャリア教育の真髄です。

■キャリアを考えるということ

キャリアを考える、というと、将来、どのような職業に就きたいかを決めることのように思いがちです。しかし、移り変わりの激しい現代社会においては、今ある職業が10年後にも同じように存在しているかどうか危うい上、終身雇用のような安定した就業スタイルも崩れてきており、キャリアの途中で転職や方向転換を余儀なくされることも珍しくありません。

そんな中では、就きたい仕事を職名や肩書きで考えるのではなく、自分の性格や得意なことをよく理解し、その時々状況に応じて、それらを存分に発揮できる機会を見つけることが重要です。興味関心のあることに限らず、より広く社会に接し、様々な経験を積み重ねて記録し、折に触れてそれを振り返って内省することで、

自分に対する気づきが得られます。そういった活動を、小中学校から大学まで、さらには人生を通じて継続し、豊かな人生を送るための糧とすることが、キャリア教育の目指すところです。

子供の頃は、行動範囲も狭く、自分の知っていることや好きなことだけで将来を考えてしまうものです。その段階で、自分の望む将来像を描けたとしても、他の可能性にも目を向けられるようにすることが、より柔軟に、そして本当に自分に合ったキャリア選択をするための土台になるのです。

■小学校から始めよう

来年度からの新しい学習指導要領では、小学校からのキャリア教育が規定されています。早すぎることはありません。キャリアを考えるた

めの土台作りをすることが目的です。とはいえ、「キャリア教育」という教科はありませんから、校内での様々な活動や既存の教科教育の中に、その視点を盛り込んでいくことになります。

学校での活動には、実はキャリア教育につながるチャンスがたくさんあります。教科において、伝記を読んだり、社会科見学に行ったり、ということはもちろん、例えば、係活動や文化祭などで、たとえ本意であっても、与えられた役割を遂行することが新しい体験になり、そこから自分が得意なことや、優しさ、根気強さといった特徴に気づきかけとなります。それらは決して突出している必要はなく、些細なことでも自己認識を深めることが大切です。それには、教師や家族など周囲の大人のサポートも欠かせません。褒めたり促したり、ちょっとした声かけが気づきをもたらします。ですから特に教師には、



PROFILE

ふじたてるゆき

1993年筑波大学院博士課程教育学研究科単位取得退学。博士(教育学、1995年筑波大学)。中央学院大学商学部、筑波大学大学院人間総合科学研究科等の教員を経て、2008年に文学科学省国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター 総括研究官(同省初等中等教育局 生徒指導調査官(キャリア教育担当)及び教科調査官(特別活動担当)併任)に就任。その後、2013年4月に現職に着任。2018年度より教育学類長。2010年には日本キャリア教育学会から学会賞を授与されている。



教科教育はもとより、全人格的な発達を支援する専門家としての側面が改めて求められるわけです。

■キャリア教育の源流

日本でキャリア教育が始まったのは1999年のことです。若者のフリーター志向が増える中、職業的な専門性を維持するためには勤労観を培うことが重要だという認識のもと、文部省(当時)の中央教育審議会が答申を出しました。最初の年収だけなら正社員もフリーターも大差ありませんが、長い目で見ると、職能教育や社会保障などに大きな違いが現れます。継続して働くことが社会の安定にもつながるため、キャリア教育がうたわれるようになりました。

キャリア教育をさらに遡ると、進路指導の理

念に突き当たります。現在の進路指導は、進学先を決めることに注力されていますが、そもそも、就職や進学を経て、その後の生活によりよく適応する力を育てる、という理念のもと、戦後まもなく導入されたものでした。しかし高度経済成長期になって、効率よく労働者を育成する必要が生じ、男子は工業へ、女子は家庭へ、という構図が、社会全体として労働力を安定させるための最適解と考えられるようになり、進路指導もそういった方向へと形骸化してしまいました。

これからのキャリア教育には、ワークライフバランスや家庭人としての役割、人種や文化の多様性の許容など、社会参画をしていくために必要な資質能力を養うことも含まれています。ですから、初等教育からスタートすることに意義があるのです。

■人生100年時代に対応する

今や、キャリアを考えなくてはならないのは若者だけではなくなりました。すでにキャリアを築き退職期に差し掛かった大人にとっても、その後の人生でどのように社会参加していくかが、大きな課題になっています。かつては、退職後にいかに隠居生活へ移行するかという観点でしたが、昨今は、より能動的に社会と関わり続けていくことが求められます。

収入を得るために働く、というだけがキャリアではありません。とりわけ、セカンドキャリアについて考えるとき、それまでのキャリアで培ってきた様々な知識やスキル、ノウハウを使って社会に貢献することも重要な要素となります。例えば、学校教育や放課後の活動などを通して、それらを子供たちに還元するといったことは、これ

から大きなマーケットになる可能性があります。ここでも、変化する環境の中で、自分の持ち味をどうやって生かすか、がポイント。その時になって急に考え始めるにしても、自分が歩んで来た道のりを振り返ることのできるポートフォリオを持っていれば、より豊かな選択肢を得ることができるでしょう。

■成長のツールに

自分の体験や考えたことを記録し残していくという作業は、その瞬間は面倒に思いますが、後になってみると、必ず役に立つものです。小学校からのキャリア教育には、この作業を習慣化できるようにするという側面もあります。

筑波大学にはこのシステムが整っていま

す。「CARIO(キャリオ)」と呼ばれるもので、入学時からの様々な体験をワークシートに記入します。利用は任意、誰かに見せるようなこともありませんが、これを4年間積み重ねていくと、専攻を決めたり、就職活動をする際の指針が自ずと得られます。自分の成長を実感し、次のステップへ進んでいくための強力なツールです。

小学校から大学、大学院までの教育過程をひとつながりのものとして捉えたキャリア教育が実現すれば、誰もが成長の記録としてのポートフォリオを持てるようになります。思春期のほろ苦い経験も、担任の先生や両親のコメントも、すべて自分の一部。いつかそれを紐解いて、自分についてのメタ認知ができれば、大人になって壁にぶつかったときにも、それを乗り越えていく力になるはずで



つくばキャリアポートフォリオ CARIO(キャリオ)

日々の学びや経験を記録に残し、キャリアを考えるためのツールとして活用する、筑波大学のキャリア支援の一つ。それぞれの学生がポートフォリオとして記録を積み重ね、必要に応じて振り返ることで、目標の設定や再構築に役立てる。授業や読書、行事や課外活動、人との出会いなど、学生生活における様々な体験やその時に考えたことなどを、場面ごとに記録するワークシートが50種類ほど用意されており、各自で選び、使うことができる。

URL https://syushoku.sec.tsukuba.ac.jp/career/?page_id=11470



TSUKUBA



視点を変えれば、すべてが輝く

医師
医療法人社団彩翠会 ホームオン・クリニックつくば理事長
平野国美氏

訪問診療に取り組まれていますね。どのような患者さんが多いのでしょうか。

高齢だったり、末期がんや難病などで、病院に行けない方を診ています。本来の専門は呼吸器内科ですが、世代も病気もいろいろなので、体のことから精神のこともまで、なんでも診ます。ただ、そういう患者さんですから、快方に向

かうということはなかなかなくて、結局は、どのように死を受け入れ、それまでを自分らしく過ごすか、ということになってきます。

訪問診療では、家庭の中に入り込むことになりますから、病気の治療だけでなく、家族関係や経済状況なんかに、関わらざるを得なくなります。患者も家族も、むしろそういうことで悩んでいて、そこをケアしないと、精神的な痛みは

取れないんです。自宅で看病していると、家族や親戚間で争いになることも多くて、夜中に呼び出されてその仲裁に入ったりすることもあります。

医者のかせに、先端医療とは無縁で死亡診断書ばかり書いているなんて、と思われるかもしれませんが、死はみんなに必ず訪れるものだし、最近では、できるだけ自宅で、という政府の方針もあります。この時代だからこそ、必要な仕事なんです。

始めたきっかけはどんなことだったのですか。

終末医療は医学のメインではありません。でも時代の流れを考えると、重要だと思いました。そんなことが成り立つとは思えないと、みんなに言われましたが、大学院を終えた頃に、大学ベンチャーが流行って、経産省の人に声をかけられて始めたんです。そのプロジェクトはすぐに潰れてしまいましたが、やってみたら意外と自分に向いているような気がして。

それ以来、自分のところには終末期の患者



ばかり回されるようになりました。もちろん患者を看取るのはつらいです。でもある時、いったん入院させた患者さんが自宅に戻ってきて、手を握って言われたんです。「自分の部屋で好きなブルームスを聴きながら死にたい」って。ある年齢を越えれば、それなりに社会的な役割は果たしているし、だったら最期のところを平和に、輝かせる仕事を誰かがやらなければならないと思いました。そのうち、賛同してくれる医者やスタッフも現れて、介護施設を作ることもできました。

患者さんやその家族との様々なエピソードを出版されていますね。

当初は、家族の揉め事に巻き込まれるのは面倒だと思っていたんですけど、すぐに頭を切り替えて、それを楽しむようになりました。他人の家をドアの隙間から覗いている感じですね。不謹慎かもしれませんが、そうやって見ていると、どの患者さんにも物語があって、もともと文章を書くのは大好きだったので、それを書きとめていくうちに、出版のお話をいただいて、ドラマ化までしてしまいました。

死と向き合うプロセスは、人生を振り返る時間です。特に高齢者の場合は、死そのものよりも、その前の苦痛や残される家族を心配します。機械につながれて1秒でも長く生きるよりも、他にやりたいことがあるはずで、それを少しでも実現させてあげることで、本人も家族も納得できるんですよね。医者としても、なるべく自然な形で、死亡診断書に「老衰」と書き、家族には「大往生でした」と言ってあげたい。見せ方、捉え方で、死は必ずしも敗北ではなくと思うんです。

ところで、学生時代の筑波大はどんな場所でしたか。

実家は龍ヶ崎で、小学生の頃に筑波大ができました。グラウンドが土じゃなくてゴムでできて、なんて聞いて、驚いて見に行ったりしました。偏差値も低かったし、それまでは実家の自転車屋を継ぐ気でいたんですけど、東京へ行かなくても大学へ行ける、自分のためにできたん

じゃないかって勘違いしちゃって。

医者を目指したのは、子供の頃に肺炎で死にかけたことがきっかけです。1浪してなんとか入学しましたが、正直、辛い場所でした。授業についていけなくて2年留年しましたし、一生懸命やったのに、研修医としての評価も散々でしたからね。対人関係もあまりうまくいなくて、勉強しに行くというよりも、気に入らない先生をなんとかしてやりたい、なんて気持ちで大学に通っていた時期もあります。とにかく居場所がない感じでした。

これからやりたい医療や活動について聞かせてください。

50歳を過ぎて結婚したのですが、他人と暮らしてみても、自分が変わっていることに気づきました。一種の発達障害だったんです。それがわかってからは、それまで自分がうまくいかなかったいろいろなことも腑に落ちて、楽しく生きられるようになりました。一見、マイナスに思えることも、視点が変われば輝きます。だから、これからは発達障害の人たちの支援もしていきたいと考えています。

困っている時に誰かが手を差し伸べてくれるというのは、どんな場面でもあることです。でも発達障害の人たちは、その手を

拒否してしまったり、気づかずに見過ごしてしまうんです。支援する側の接し方を変えることで、一步を踏み出せる人も増えるはずですよ。今、大学でなんとなく居心地悪く感じている人も、引きこもったり悲観的になる必要はありません。誰だって、居心地の良い場所が見つかれば、それぞれの個性を発揮することができるんです。



PROFILE ひらのくによし

- 学歴
 - 1992年3月 筑波大学 医学専門学群 卒業
 - 2002年4月 筑波大学 博士課程医学研究科 修了
- 職歴
 - 1992年3月 筑波大学附属病院及び県内の中核病院にて地域医療に携わる
 - 2002年4月 訪問診療専門クリニック「ホームオン・クリニックつくば」開設
 - 2003年9月 医療法人社団「彩翠会」設立、理事長に就任
- その他
 - 2004年 日本民間放送連盟賞ラジオ報道部門・最優秀賞受賞(診療活動を紹介した茨城放送報道スペシャル)
 - 2009年10月 小学館より「看取りの医者」刊行
 - 2011年12月 「看取りの医者」大竹しのぶ主演でドラマ化される

附属学校めぐり

伝統を受け継ぎながら、自由に弾ける

筑波大学には11の附属学校があり、それぞれの分野でわが国の教育をリードしています。各学校のユニークな先生や授業、行事などの活動を紹介します。

筑波大学附属駒場中・高等学校

筑駒文化祭

音楽祭、体育祭と並び、附属駒場中・高等学校で毎年開催される「三大行事」の一つ。中でも文化祭は、3日間で延べ1万6000人程度が訪れる、学校最大の行事となっている。中学1年から高校2年までは、クラスごとに展示や演劇などを披露する一方、高校3年は、クラスにとらわれず、いくつかの班に分かれてステージや緑日などの活動を展開する。「生徒が作る」という伝統が貫かれており、出し物にも運営にも、生徒たちのオリジナリティが光る。

■筑駒のメインイベント

附属駒場中・高等学校（筑駒）の文化祭は、毎年11月、文化の日を挟んだ3日間に行われます。保護者などの関係者だけでなく、近隣住民や他校の生徒、筑駒の受験を目指す親子連れなどが、ひっきりなしに校門を通っていきます。この文化祭は、6月の音楽祭（クラス対抗合唱コンクール）、9月の体育祭に続く年間3大行事の一つで、生徒たちが最も力を入れるイベントです。

今年のテーマは「暁」。全校アンケートから案を出し、その中から選ばれたものです。新元号の始まりも意識しつつ、自分たちの輝きや将来への期待が込められています。校門の看板などのメインビジュアルにも、この「暁」をイメージした、ちょっと和風のデザインが施されています。

校内に入ると、外の広場では、飲食も含む模擬店が並び、特設ステージではショー形式の様々なプログラムが行われています。また、い

つものは1号館、2号館と呼ばれている校舎も、この日はBlue館、Red館などと4色に色分けされ、中学1年生から高校2年生までがクラスごとに展示や演劇、ゲームなどの出し物（デコ）を行ったり、各クラブ活動を紹介するイベントが繰り広げられています。どの会場も、とにかく人の波が途切れることがない盛況ぶり。女子中高生の姿もたくさんみられ、いつもの男子校の雰囲気とは違った、華やかさもあります。

■生徒たちのアイデアを生かして

文化祭を取り仕切っているのは実行委員会。高校2年を筆頭に、中高の各クラスから集まったメンバーで構成されます。長年、蓄積されてきたノウハウがあり、これだけ大きなイベントでも、企画・運営には抜かりがありません。ほとんどのメンバーが継続して活動しており、学年ごとの役割も決まっています。徒弟制度のようにして、この伝統行

事のノウハウを受け継ぎつつ、毎年、新しいアイデアや工夫を加えていきます。指導にあたる先生は、それらの提案をどう実現できるか、その検討をサポートしながら、生徒たちを見守ります。

パンフレットやホームページを作るのも生徒たちです。デザインにもこだわりが見られ、プロ顔負けの出来栄です。各イベントや模擬店の待ち時間も、行列の長さから経験的に計算し、それをリアルタイムでホームページに掲載していきます。こういったスキルも、先輩の後ろ姿から自然と学び、ブラッシュアップされたものです。

今年は台風の影響で、開催直前の追い込み時期に、予定通りの準備ができなかったため、やや心配もありましたが、なんとか間に合って初日を迎えることができました。実行委員長の齋藤蓮さん（高2）は、「いろんなデコがあって、それをまとめていくのは大変でしたが、3日間、しっかりやっていきたい」と意気込みを新たにしました。



■全力をつぎ込む3日間

筑駒では毎年クラス替えがあります。ですから、クラスごとのデコも、毎年違う仲間違う企画を考えることになります。慣例的に、中学1・2年は展示、中学3年から高校2年は演劇、というような大まかな流れがありますが、近年は、謎解きなど参加型の要素を取り入れたアトラクションも出てきました。一方、クラブ活動の紹介コーナーは、それぞれ専門的な内容を含みながらも、展示や実演、体験を通してそれらの魅力が伝わってくるものばかり。まさに、普段、学校で行われていることが全部詰まっている感じの文化祭です。

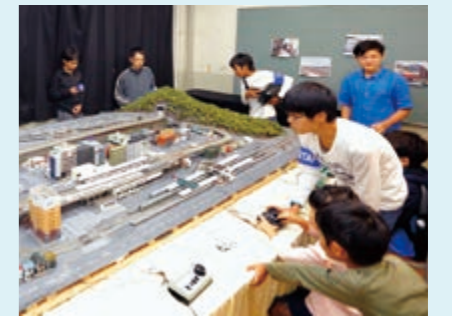
屋外は、より一層、賑やかです。カレーやスイーツなどの屋台、ゲームなどのブース、古本市などが立ち並び、ステージでは、今や名物となったミス筑駒やMr.筑駒といったコンテストなどのショーが次々と行われます。大人気のコント・演劇は、「スカイホール」という屋内3階のホールで行われています。どのコーナーにも人だかりができ、移動もままならないこともあるほどです。これらはすべて高校3年生の担当。筑駒での最後の文化祭を盛り上げようという熱気にあふれています。

■1年が終わりに、始まる

文化祭で一番気合が入っているのは高校3年生です。他学年はクラス単位でデコを考えますが、最後の年だけは、クラスを解体し、ステージ、緑日、喫茶など6つの班に分かれて活動します。前年の文化祭が終わった翌日から班割りが始まり、1年かけて準備してきた集大成をこの3日間にぶつけます。

普通なら、高校3年のこの時期は、大学受験が気になるころですが、筑駒では文化祭が終わるまでは、なかなか受験勉強に専念できません。でもそれは中学に入学した時からの約束。この文化祭に憧れて入学してくる生徒も多く、焦りや抵抗はありません。他の行事も含め、最初からそのつもりで、勉強の段取りを考えているのです。

高校3年生に限らず、生徒たちにとっては、かなりきついスケジュールです。けれども、全体の生徒数が少ないこともあり、全員参加でなければ、この文化祭を成功させることはできません。多少の温度差はあっても、すべての生徒が何らかの役割を担い、一丸となって目標に向かいます。年間の行事と勉強とのメリハリがあることで、かえって集中力が増すという効果も生んでいるのでしょう。暁の先には無限の将来が広がっています。



副校長（右）と生徒部文化行事係の山本智也主幹教諭

「文化祭」が生徒を育てる

梶山 正明 副校長

本校では、学業・学校行事・部活動を三本柱として生徒の全面的な人格形成を促しています。小さな学校に沢山の行事が詰まっているので、すべての生徒がリーダーとなりフォロワーとなって行事を企画・運営・参加する機会を持ちます。中でも文化祭は本校最大の行事であり、各学年

の生徒が力を出し切るために、文化祭実行委員会の生徒が綿密なスケジュールを組んで全体を運営していきます。文化行事係担当3年目の山本主幹教諭は、委員会運営の主体を生徒に任せながら、全体を俯瞰しつつ適切なアドバイスを与えて、文化祭運営を支えています。

LIFE

筑波大生



多様な学びで世界を目指す

ウズベク語、ロシア語、英語、日本語の4カ国語を操る。アニメ映画「君の名は。」ゆかりの岐阜県・飛騨高山を訪ねたいと考えている。



社会・国際学群社会学類
国際社会科学専攻3年

ジェデウラエフ・ボホディル さん

ウズベキスタン出身のジェデウラエフ・ボホディルさんは日本の桜が大好きだ。

小学生の時、映画「ラストサムライ」を見て、桜の美しさと侍のカッコよさに感激し、日本への関心が芽生えたという。

高校まで首都タシケントで過ごし、国立大学の受験に挑んだが、失敗してしまう。落ち込んだが、日本のアニメ「Re:ゼロから始める異世界生活」を見て励まされたという。

そんな時、タシケントのウズベキスタン日本センターで働く知人女性から、筑波大学の存在を紹介された。調べてみると、東京から近く、留学生も多い。ノーベル賞受賞者も出て

いると分かった。タシケントで開かれた日本留学フェアにも参加し、筑波大の英語プログラムコースへの進学を決断した。

翻訳家の父親の下で英語は勉強しており、日本は安全な国という印象もあった。

来日して2年余り。クイズ形式やスライドの活用など授業は工夫が凝らされ、「どれもちょー楽しい」と上達著しい日本語で語る。

主に学びたいと考えていたのは経済学だったが、金融にも興味が湧いた。仮想通貨や外国為替のことを勉強したいと相談すると、先生たちはすぐにアドバイスしてくれた。学生の興味に柔軟に応えるサポート体制も、筑波大の大きな魅力の一つだと感じている。

もう一つの魅力は、世界各地から多くの留学生が来ていることだ。いろいろな国の学生と友人になることは、将来の役に立つ。それぞれの文化の違いを知ることも面白い。

例えば、日本人は「人の邪魔になりたくない」と考えがちに見える。また、日本の男性は受け身で、好きだと告白するのは女性ばかり。

ウズベキスタンとは大きく違うという。

コンビニエンスストアでのアルバイトで接客に苦労するなど、日々の暮らしで悩むこともあったが、最近は学生生活を楽しむ余裕も出てきた。かかとを滑らせるようなステップが特徴のシャッフルダンスを留学生仲間と始め、インスタグラムなどに動画を投稿している。ギターやスケートボードにも挑戦中だ。

卒業後は日本で就職することも考えていたが、更に世界を知るために、今はニュージーランドでの大学院進学を考えている。

「Live every day like it's your last day. (今日一日を精一杯生きる)」がモットーというボホディルさんの可能性は無限大だ。



後輩にひとこと
世界中から学生が集まり、お国柄や考え方の違いを知ることができるのも、筑波大学の特色です。悩むことがあっても、先生たちや先輩たちに相談すれば、すぐに手を差し伸べてくれます。きっと、充実した学生生活が送れるはずですよ。

人間性も応援される選手に

ユニバーシアードの対米国戦で2得点を挙げ、準決勝進出を決めた。ドリブル突破からシュートを決めた2点目は、自分でも会心のゴールだった。



体育専門学群2年 千葉玲海菜 さん 女子サッカー部

筑波大学女子サッカー部は今季、昇格したばかりの関東大学リーグ1部で7位となり、5年ぶりの全日本選手権(インカレ)出場を決めた。主力として活躍したのが千葉玲海菜(れみな)さんだ。7月にイタリアで開かれたユニバーシアード夏季大会の女子サッカーでは、準優勝した日本チームの一員として全試合に出場し、同世代を代表する選手となっている。

サッカーを始めたのは小学1年生の時。両親が共働きで、2歳年上の兄と一緒に地元・福島県いわき市の放課後児童クラブ(学童保育)に入った。皆でボールを蹴って遊ぶようになり、兄に負けまいと取り組むうちに、すっかりサッカーの魅力の虜になった。

それからは、家でもリフティングするなどボ-

ルに触らない日はない毎日に。中学生になると、地元のクラブチームで男子に交じってプレーした。通った中学校には女子サッカー部がなかったからだ。高校では親元を離れて女子サッカーの強豪、静岡県藤枝順心高校に進んだ。冬の女子サッカー選手権など高校3年間で3度の日本一を経験する。フォワードなど常に攻撃的なポジションを担った。

筑波大への進学を決めたのは、学問とスポーツの両立をしたいと考えたからだ。

体の仕組みを知る解剖学や生理学、栄養学、コーチング理論など、大学の授業はスポーツ選手にとって欠かせない知識が得られるものが多いという。「知識があれば、スランプに陥っても抜け出しやすいはず。卒業研究では、自らの競技力向上につながるような研究に取り組んでみたい」と語る。

女子サッカー部は、千葉さんのような日本代表経験者から、始めて間もないメンバーまで選手層の幅が広い。2年生ながら、千葉さんにはチームを引っ張る存在として期待がかかる。だからこそ、日々の練習では「常に自分に厳しくあ

ること」を心掛けている。

特別指定選手として、筑波大所属のまま、なでしこリーグのジェフユナイテッド市原でプレーする経験もした。レベルの高さを体感するとともに、「日本の女子サッカーを盛り上げたい」という気持ちが高まった。

まずは、筑波大女子サッカー部をもっと強くし、もっと実績を残し、卒業後にチャンスがあれば海外でもプレーしたいと願う。

「サッカーだけでなく、人間性も含めて応援してもらえるような選手になりたい」

その目標に向かって、千葉さんは今も、成長を続けている。



インカレ出場を決めて喜ぶ女子サッカー部



後輩にひとこと
筑波大学の体育専門学群は、競技力の向上だけでなく、自分の取り組み次第で専門的な研究ができる環境があります。他の大学にはない大きな魅力です。競技面で悩んだり戸惑ったりしても、学問的な知識があれば、支えになつてくれると思います。

学生の活躍

全日本インカレで健闘

大学スポーツの日本一を決める全日本選手権大会(全日本インカレ)は、競技ごとに大会が開催されます。今年も、各競技で本学の学生たちが活躍し、好成績を取めました。



2019年6月～12月に開催された全日本インカレで優勝した団体・個人

競技名	大会名	開催日	結果
剣道	全日本学生剣道選手権大会	6/30	個人優勝 星子啓太 (体育専門学群3年)
体操	第15回全日本学生ラート選手権大会	8/24-25	団体優勝
陸上競技	天皇賜杯第88回日本学生陸上競技対校選手権大会	9/12-9/15	総合優勝 (女子)
男子ハンドボール	高松宮記念杯男子62回全日本学生選手権大会	11/8-11/12	優勝
オリエンテーリング	2019年度日本学生オリエンテーリング選手権大会	11/9-11/10	優勝 (スプリント競技部門 男子選手権クラス) 小牧弘季 (生物資源学類3年) 優勝 (ロングディスタンス部門 女子選手権クラス) 宮本和奏 (地球学類3年)
バドミントン	全日本学生バドミントン選手権大会	10/11-10/17	優勝 (女子シングルス) 香山未帆 (体育専門学群3年)
女子バレーボール	秩父宮妃賜杯全日本バレーボール大学女子選手権大会	11/25-12/1	優勝
男子バスケットボール	全日本大学バスケットボール選手権大会	12/10-12/15	優勝

学生の活躍

全日本大学対抗テニス王座決定試合 女子テニス部が初優勝



主将の岩井さん

10月9日～13日、愛媛県松山市で開催された全日本大学対抗テニス王座決定試合(以下、王座)にて、女子テニス部が初優勝しました。王座は大学の団体戦日本一を決める大会で、全国各地を代表する10大学(関東・関西からは2大学ずつ)が集まり、ダブルス2試合、シングルス3試合で争われます。1試合も落とさずに進んだ決勝では、関西1位の関西大学と対戦しました。午前10時から午後9時までの長い激闘を制し、ダブルス1-1、シングルス2-1の計3-2で優勝しました。

創部から130年を越える長い歴史の中での初優勝、国立大学としても初という快挙を成し遂げ、その瞬間は部員のみならず、応援に駆けつけたOBOGたちも涙が止まりませんでした。部員数は少ないものの、身長145cmという小柄ながら力強いプレーが持ち味の岩井真優さん(体育専門学群4年)を中心に良くまとまり、桐の葉の部旗が松山の空に輝いてはためく素晴らしい大会となりました。



イベント

令和元年度筑波大学附属図書館特別展「東京1964と日本文化について考える」

11月1日～12月6日、中央図書館で特別展「東京1964と日本文化について考える」が開催され、学内外から1,940名が来場しました。本特別展は、日本がどのようにオリンピックを受容し、1964年の東京開催を実現しようとしたのかを、附属図書館所蔵の貴重な資料から考えていくもので、本学における「東京2020オリ

ピック・パラリンピック競技大会参画プログラム」の一つとして企画されました。

資料47点は3部構成で展示され、第1部ではオリンピック招致活動に関する資料を、第2部ではオリンピック開催中の雑誌記事や芸術展示の様子を、第3部では開催後の報告書や写真集を紹介しました。また、会期中にはこの

特別展を企画した体育系真田久教授による講演会とギャラリートークを実施し、好評を博しました。

※特別展は毎年開催され、それぞれのオフィシャルWebサイトが公開されています。

<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/lib/ja/support/special-exhibition>



1940年大会招致のために配布された写真集「日本」



1964年大会の招致を目指して作成された写真集「TOKYO」



11月10日に行われたギャラリートーク

「ミライの体育館」で附属駒場高校と 附属大塚特別支援学校小学部が交流



フロアに投影された指示位置に整列する児童たち

附属駒場高校(駒場高)と知的障害が対象の附属大塚特別支援学校小学部(大塚)の交流会が12月16日に開かれました。これは、大塚を舞台とした本学の「ミライの体育館」プロジェクトの一環で、駒場高の生徒が制作したオリジナルゲームを小学部の児童たちが楽しみました。

同プロジェクトでは、2015年に大塚の体育館天井にプロジェクターやセンサーを設置しました。これにより、子どもたちの動きに合わせてフロアにさまざまな映像を投影し、子どもたちの行動を支援します。大塚の中村晋主幹教諭は

「子どもたちが主体的に活動できるようになる」と、その効果を説明します。

交流会には、障害理解の課題研究「ともに生きる」を選択する駒場高2年生の17人と大塚の児童23人が参加しました。

駒場高生たちは、▽フロアに投影された赤いエリアを避ける「わくからはみ出さないで」▽投影された毒グモを避けて宝を探す「たからにたどりつけ」▽「すごろく」——の三つのゲームを制作。プロジェクトを主導する本学システム情報系の鈴木健嗣教授の指導も受け、交流会



ゲーム「わくからはみ出さないで」



ゲーム「たからにたどりつけ」

での初披露にこぎつきました。

生徒と一緒にフロアを駆け回るなど、児童たちは大喜びでゲームに興じていました。

ゲームをプログラムした駒場高の男子生徒は「面白いものができるか不安だったが、楽しんでもらえてよかった。筑波大の附属校ならではの体験ができた」と話していました。

学生・市民協働の「茅葺きワークショップ」

11月14日～11月30日、石岡市八郷地区にて、学生と市民との協働による「茅葺きワークショップ」が実施され、延べ51人の本学教員・学生と延べ29人の市民が参加しました。この取り組みは、システム情報工学研究科社会学専攻のワークショップ系演習「茅葺き民家を活用した地域再生拠点づくり」の一環で、包括的な地域課題解決を志向し、里山の風景を保全しつつ、近未来の地域社会の在り方を提示することを目指しています。

今年度は、交流創出を図る地域再生の拠点構築に向け、古民家活用の計画・改修設計を学生が立案しました。また、屋根に用いる茅は、昨年度の冬につくば市内にて採取した

ものです。熟練職人の指導のもと、準備から葺き替えまで一貫した作業を体験し、学生にとっては、日本の伝統的な技術の結晶ともいえる茅葺き民家に深く触れる機会にもなりました。

半月にわたる葺き替え期間中には、近隣住民の自然な立ち寄りも誘発して、穏やかな地域交流も生まれました。



屋根葺き替え作業の様子



学生・参加市民・地元住民と記念撮影

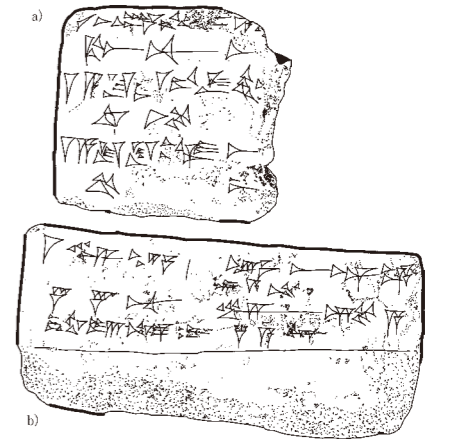
最古のオーロラ様現象の記録を発見!

粘土板などに記された古代の資料には、当時の様々な天文現象の記録が残されているものもあります。こういった記述は、地球上で過去にどのような現象があったのかを知る手がかりとなります。

本学人文社会系の三津間康幸助教らの研究チームは、紀元前8～7世紀に楔形文字とアッカド語で粘土板に記された占星術レポートを解析し、オーロラ様現象についての記録を発見しました。この占星術レポートは、アッシリア(現イラク北部)の王に説明するために、実際にあった天文現象を記録したもので、オリジナルの粘土板は大英博物館に保管されています。今回の研究では、すでに英訳され公表されているアッシリア占星術レポート刊本を解析するとともに、その原本となる粘土板を模写し、楔形文字を新たに翻訳しました。

その結果、これらの資料には「赤光」「赤雲」「赤が空を覆う」といったオーロラ様現象と、その後に予測される出来事について、当時の3人の天文占星学者が王に報告した内容が記されていることがわかりました。これは紀元前680-660年前後のものと見られ、これまでに知られていた最古のものよりも、さらに100年ほど古いオーロラ様現象の記録です。

オーロラという、北極や南極などの緯度の高い地域での現象のイメージがありますが、現代においても低緯度地帯でも観測されることがあります。美しく神秘的なオーロラも、現代では地球上の電力や通信網に深刻な影響を与えうる太陽活動。太古の気象の記録を現在の観測データと比較することは、発生頻度の予測や災害への備えにもつながります。その観点からも、古代の記録を探索し読み解く研究が進められています。



紀元前680-660年前後のオーロラ様現象を示す粘土板2点の模写。a)には「赤光」、b)には「赤雲」が記されている。

虹色に輝く「クシ」の謎を解く



虹色の輝きを放つクシクラゲ
(米科学誌の表紙を飾りました。©Cell Press)

最も原始的な動物の仲間でありながら、光の加減によって虹色に美しく輝くクシクラゲ。見かけはクラゲに似ていますが、分類上は有櫛(ゆうじつ)動物に属します。最近では多くの水族館で展示され、人々の目を惹きつけています。光っているのは「櫛板」という運動器官で、櫛毛という目に見えないほど小さな細胞の毛が数万本も束になったものであることは知られていますが、それを形作っている分子の正体はわかっていませんでした。本学生命環境系の稲葉一男教授らの研究グループは、その解明に挑みました。

クシクラゲの一種、カブトクラゲを長期飼育し、遺伝子カタログを構築した後に、単離した櫛板に含まれるタンパク質を分析しました。すると、有櫛動物の仲間だけが持つ「CTENO64」というタンパク質の存在が明らかになりました。ま

た、このタンパク質は、櫛板の根元近くに分布し、櫛板の中で櫛毛同士をつなぎとめていることもわかりました。CTENO64がなくなると、櫛毛の動きがバラバラになり、正常に移動することができなくなります。つまり、CTENO64は、櫛板の中で櫛毛を規則正しく配列させ、そのことによってタマムシや孔雀の羽のように、反射する光が干渉しあって生み出す「構造色」を作り出すのです。さらに、無数の櫛毛を束ねて板状にし、協調的に動かして移動する「オール」を作る上でも、重要な役割を担っているわけです。

別の研究では、クシクラゲの櫛板には、光の方向や強度を自在に制御できるという性質があるらしいことも報告されています。虹色に光りながらゆったりと水中を浮遊する「癒し系」のクシクラゲが、実は緻密な構造で光を操るツワモノでもあったとは驚きですね。

柳沢正史教授が令和元年度文化功労者に選出



令和元年度文化功労者顕彰式

令和元年度文化功労者・文化勲章受章者が発表され、本学 国際統合睡眠医科学研究機構長の柳沢正史教授が文化功労者

に選出されました。文化功労者は、日本において、文化の向上発達に関し特に功績顕著な者に贈られます。柳沢教授は分子薬理学の分野において、強力な血管収縮作用を有する生理活性物質「エンドセリン」と、睡眠／覚醒を制御している神経伝達物質「オレキシン」を発見し、その作用機構を解明するとともに、ヒトの疾患との関わりを明らかにし、革新的な医薬品開発に結び付ける優れた業績を上げ、医学の発展と人類の健康増進に多大な貢献をしたことが評価されました。

また柳沢教授は、茨城県が学術・芸術・ス

ポーツ等の各分野において県勢の発展に著しい功績があった人物・団体をたたえる表彰のうち、最高位にあたる県民栄誉賞も受賞しました。



柳沢正史教授

令和元年 秋の褒章において山海嘉之教授が紫綬褒章を受章



山海嘉之教授

科学技術分野における発明・発見や、学術及びスポーツ・芸術文化分野における優れた業績を

本学サイバニクス研究センター研究統括の山海嘉之教授(システム情報系)が本年秋の紫綬褒章を受章することが決定しました。紫綬褒章は、

げた個人に授与されます。

山海教授は、人とロボットと情報系が融合した「サイバニクス」という新学術領域の開拓を推進してきました。脳神経・筋系からの生体電位信号によって人とロボットをつなぎ、装着することで身体機能を改善・補助・拡張・再生する世界初の「装着型サイボーグHAL」を実現し、脳神経・筋系疾患に対するサイバニクス治療、高齢者の自立支援、労働作業支援を行う革新的サイバニクスシステムの基礎研究と社会実装を同時展開しています。このような取り組み

が、人間医工学研究の功績として高く評価されました。



装着型サイボーグHAL

本学広報のエントランス 「筑波大学サテライトオフィス」

つくば駅前の複合商業施設「BiViつくば」2階にある筑波大学サテライトオフィス。本学の魅力や情報をより多くの方々に届ける拠点として、2015年に設置されました。各学類・専門学群のパンフレットや入学案内をはじめ、様々な刊行物など、本学に関する資料や情報を提供するほか、本学が主催する行事やタイムリーな話題について、展示等で発信しています。本学の職員と現役学生とが共同で運営にあたっており、本学の基本情

報から受験や学生生活といった学生目線の話まで、幅広く対応することが可能です。

現役学生スタッフとして活動する四家武彦さん(知識情報・図書館学類3年)は、「ある意味で筑波大学を広報する最前線。訪れる方々に的確な情報を提供し、本学の魅力に触れ、気持ちよく過ごせる場所にしたい」と語ります。筑波大学サテライトオフィスは、市民と大学との懸け橋としての役割を担っています。



訂正とお詫び:TSUKU COMM Vol.45 P18「生物学の幅広い魅力を語る『生つくば』」において、「坂寄裕紀さん(生物資源学類2年)」と掲載しましたが、「高田一成さん(生物資源学類2年)」の誤りです。訂正してお詫び申し上げます。



可能性をひらく

筑波大学は、性別、国籍、文化の違い、年齢、障害の有無にかかわらず、人の可能性と多様性を尊重し、一人ひとりの個性とその能力が発揮できる共生キャンパスの実現を目指しています。

知のプロフェッショナルとして個性輝く人材を世界へ届ける

筑波大学は「研究型総合大学」として、日本のみならず世界をも牽引する使命を担っています。学生が本学で身につけたトランスファラブル・スキル*を生かし、イノベティブに活躍できるよう、キャリア形成をサポートします。

*トランスファラブル・スキルとは、「一つのコンテキストで学んだことが他のところでも使えるという知識で、しかもその知識は分野に固有の、もしくは研究に関連したスキルをどこか他のところで転用することを容易にするものである」(欧州科学財団)

筑波大学ダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリアセンター(DACセンター)では、学群・大学院(前期・後期)・ポストドクに対し、各教育組織と連携した全学的なキャリア形成支援も行っています。

特に博士号取得者や博士課程で学んだ人材は、「知のプロフェッショナル」として産業界からも高い評価を得ています。DACセンターでは、産業界との強いコネクションを生かし、本学の大学院生・ポストドクと産業界をつなぐ機会を提供するとともに、本学で学んだ人材の価値を社会へ積極的に発信しています。

様々な取組の一例として「博士後期学生・ポストドク対象採用のための合同企業説明会」があります。本イベントでは、参加者と企業とがポスター発表や個別ブースを通してコミュニケーションを図ることができる工夫をし、双方にとって得るものが多い場づくりに努めています。

そのほか、産業界における「研究型インターンシップ」(産学協働イノベーション人材育成協議会に加盟)の推進や、博士後期学生に特化したキャリア相談担当者の設置など、研究型大学として一人ひとりの学生に寄り添い、各教育組織と対話しながら、DACセンターがすべき支援を考え提供し続けます。

DACセンターの役割



「研究型インターンシップ」説明会の様子



「博士後期学生・ポストドク対象 採用のための合同企業説明会」でのポスター発表の様子

センター長 五十嵐 浩也

DACセンターでは博士後期課程・ポストドク対象のHPやTwitterを開発し、情報発信に努めています。博士後期課程・ポストドクの皆さんだけでなく、大学院進学を検討している学群の皆さんも、ぜひDACセンター(スチューデントプラザ2階)に気軽にご相談ください。

就職課(博士後期以降の学生のキャリア支援)のHP



ツクバでツナがるリレーメッセージ

5000人を超す教職員がいる本学。それぞれが切り取るツクバの「今」を、8本のバトンでつなげていきます。

感染症対策に挑む
看護師、と言うと病棟や外来で勤務しているイメージかと思いますが。私は、感染管理部という院内の感染症対策に関する業務を、医師・薬剤師・検査技師・事務員の方々と多職種連携でしています。業務範囲は広く、感染症対策だけでなく廃棄物やリネン等の管理も含まれます。最近、行政・地域の施設の方々の業務が増えています。県内では非常に少ない感染症科と連携しているのが、当院感染管理部の特徴であり強みでもあります。特徴と強みを生かして、感染症対策において地域貢献ができればと考えています。

BATON 01

附属病院感染管理部
堤 徳正 さん



筆者中央

NE XT
今回は、附属病院総務部の富山理恵子さんです。「感染管理部の事務で活躍いただいております。」

BATON 05

芸術系
直江俊雄 さん

来たれ、アーティスト

高校生が書く美術に関するエッセイのコンテスト「高校生アーティスト大賞」を開催しています。2019年は英語部門に12の国と地域から51編(中国15、インド9、日本6、アメリカ4、カナダ3、マレーシア3、イギリス3、オーストラリア2、タイ2、台湾2、ニュージーランド1、ブルガリア1)、日本語部門に513編(うち12編はアメリカ、インド、韓国の海外から)が集まり、2020年2月の表彰に向けて、学生と教員で選考に取り組んでいます。



写真上:2019年開催の第8回広報用バナー、写真下:前回第7回の表彰式

NE XT
今回は、URA研究戦略推進室の栗原翔吾さんです。「研究者間のつながりをサポートして下さるなど、いろいろとお世話になっています。」

BATON 02

総務部
杉本盛太郎 さん

つくばへ帰還しました



筆者上段右

つくばの地を離れ、東京キャンパスや附属駒場、文部科学省と都内を渡り歩いて早八年。久しぶりにつくばで働くことになりました。長らく都会の喧騒の中で過ごしてきましたが、緑豊かなつくばの地で、穏やかな日々を楽しんでいます。大自然と言えば、夏に富士山に登頂してきました。雲海の素敵さに心を打たれ、軽快に登り始めたのも束の間、次第に雨が降り始め、御来光どころか周りの景色を望むことも出来なくなってしまいました。ただ、そんな中でも富士山の最高峰である剣ヶ峰に到達することができ、代えがたい経験となりました。

NE XT
今回は、人文社会系の志田泰盛さんです。「職員バドミントン部でお世話になっている、トリッキーなプレースタイルの先生です。」



サイクリング写真:筆者撮影、左下写真:筆者左から2番目

街乗りの楽しみ

BATON 06

教育推進部
小橋洋志 さん

趣味で自転車に乗っている。と言っても、びちびちのウェアに身を包んだローディではなく、ほぼ普段着で走る街乗り派だ。元々はMTB乗りで、かつては地形図を見ながら走り回っていたが、先の東日本大震災の頃から街乗り派になった。りんりんロードを走ったり、最近ではつくば市内のパン屋さん巡りなんかをして休日過ごしている。そのりんりんロードがナショナルサイクルルートに指定されたのをご存知だろうか。平坦なルートだけれど霞ヶ浦を一周すれば約180kmもあるし、脇道にそれて筑波山に登るなんてこともできる。ぜひ一度走って観ていただきたい。

NE XT
今回は、生命環境エリア支援室の谷本加奈里さんです。「職員バドミントン部Cチーム(部員募集中!)で、しっかり者で気遣いを忘れない頼りになる仲間です。加奈里さんよろしくね。」



筆者前列左から2番目

「学生さんと歳が近くて楽しい」と思っていた頃もありましたが、勤続5年目になり、徐々に世代の差を感じ始める時期になりました。27歳で着任した僕も今や32歳、つくばの良さは人との距離の遠さだと思っています。他人に干渉せず、おおらかな気分で自然と対話する。そんな毎日の中、支えてくれる人々に感謝することも同時に増えていきました。興味の赴くままに価値が出せるつくば系を目指して頑張ります。

NE XT
今回は、副学長・理事の金保安則さんです。「金保先生とは産学連携での関わりや授業で一緒にいるなど多くの場所で楽しい時間を過ごさせていただいております!」

BATON 03

図書館情報メディア系
落合陽一 さん

つくば系でいこう!

BATON 04

学術情報部
佐藤まみ子 さん



構内で野鳥観察
体調管理のためにウォーキングを始め、家の近所によく散歩コースを見つけました。市民有志が整備した「守谷野鳥のみち」です。早朝、散策路を歩くと、多くの鳥が鳴いています。チョットコイと鳴くコジュケイ。キリコロとかわいい声のカワラヒワ。高く一声鳴くキジ。春、草地の上、空高く囀っているのがヒバリ。胸に黒いラインのシジュウカラ。鳴き声の分かる鳥が増えてくると、キャンパス内でも多くの鳥

がいることが分かってきました。朝の通勤時や昼休みは鳥の声を楽しんでいます。

NE XT
今回は、数理工学エリア支援室の渡辺成美さんです。「入職当時からお世話になっています。技大・東京キャンパスと異動先が同じことが多く御縁のある先輩です。」

BATON 07

人文社会系
関根久雄 さん



つながりを作る

NE XT
今回は、体育芸術エリア支援室の漆原健太さんです。「私の学類ゼミの卒業生です。職員になって以来、一貫して会計畑で頑張っているようです。」



筆者下段左から2番目

今年永年勤続表彰を受け20年の時のたつ早さに驚きました。私が勤めている歯科技工科は日本で唯一、聴覚に障害のある方に配慮した歯科技工士養成施設で生徒は全国から集まります。歯科技工の仕事自体に聴覚は左右しませんが手作業をしながらのやり取りは難しいので、一連の流れを妨げずわかりやすくなる工夫をしています。歯科技工科では年に数回、学生会主催の親睦レクリエーションがあります。余興として生徒も教員も全員参加する「ジェスチャーゲーム」を行うと、生徒の表現力の豊かさに脱帽です。

BATON 08

附属聴覚特別支援学校
松本 愛 さん

歯科技工士を育てる

NE XT
今回は、附属視覚特別支援学校の加藤真弓さんです。「以前本校の寄宿舎にいらっやいましたので、大変お世話になりました。笑顔が素敵です!」

筑波大学の入試改革 4

2021年度(2021年4月入学)から、日本の大学の入試制度は大きく変わろうとしています。これに伴い、筑波大学も新しい入試の仕組みを導入します。その概要を、4回にわたって紹介します。

グローバル化が進む筑波大学の入試

日本の大学では、2008年に政府が策定した留学生30万人計画を踏まえ、留学生を増やすための様々な方策が行われています。筑波大学でも国際化拠点整備事業(グローバル30)、およびスーパーグローバル大学創成支援事業に採択され、グローバル化を推進するとともに、留学生の受け入れを積極的に進めています。

筑波大学は、開学当初から国際化に取り組み、現在110を超える国・地域から、学群と大学院を合わせて約2,500人の留学生が在籍しています。その割合は全学生の約15%に上ります。

優秀な留学生を受け入れるため、筑波大学では国際的に魅力ある新たな教育プログラムを開発・実施し、それに合わせた入試を導入しています。また入学後には、様々な目的に合わせた能力が修得できる日本語科目及び日本事情科目を提供し、日本語教育の充実に力を入れています。また、国内から進学する学生に向けて、外国人教員が英語で行う授業の充実や英語資格・検定試験の全学的な実施と受験促進等、様々な取り組みを行っています。

このように、日常的に異なる言葉や風習などの異文化に触れ合うことができ、国境を越えた社会性や国際性を養ったり、自分の視野を広げたりすることができます。筑波大学のキャンパスでは、多くの国から集まった学生が、国籍や分野を越えて交流し、協働しています。

■グローバル入試の導入

外国人留学生を受け入れるために導入している入試のうち3つを紹介します。

●総合理工学位プログラム(学士)入試

英語による授業のみで学位が取得できるプログラムです。グローバル化と情報化が進む中で、数学・物理学・化学・コンピュータサイエンス・エレクトロニクスなどの分野横断的な理工系の課題に関心を持ち、事象を学問的に分析する応用力を備えた人材を選抜します。

●地球規模課題学位プログラム(学士)入試

英語による授業のみで学位が取得できるプログラムで、課題解決型学習による授業を基

本にしています。地球環境や、人類社会の問題を文理横断の知識を活用しながら考察し、将来、国内外のグローバル企業、国際機関等で活躍できる、またはイノベーションに貢献できる人材を選抜します。

●Japan-Expert(学士)プログラム特別入試

日本国内または母国等における日本関連企業での就職を希望する人のためのプログラムです。日本国以外の国籍を有する者を対象に、高度な日本語能力を習得の上、日本の文化・社会を理解し、農業、ヘルスケア、日本芸術、日本語教育のいずれかの分野における専門知識と思考力を有する人材を育成します。

■グローバル入試における募集人員設定

これまで、留学生向けの入試は募集人員を「若干名」として実施していましたが、2021年度入試から、一部の学群・学類において具体的な募集人員を設定します。これにより本学を目指す留学生がより増えることを期待しています。



留学生向け課外活動紹介の様子



留学生向けプログラム入学式にて

